

国営アルプスあづみの
公園埋蔵文化財発掘調査報告書 1

ほたかこふんぐん
穂高古墳群—近世集石遺構の調査

1997

建設省関東地方建設局
(財)長野県埋蔵文化財センター

(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書23

国営アルプスあづみの
公園埋蔵文化財発掘調査報告書 1

ほたかこふんぐん
穂高古墳群—近世集石遺構の調査

1997

建設省関東地方建設局
(財)長野県埋蔵文化財センター

序

中部山岳国立公園の中心を占める北アルプスの麓、安曇野は、常念岳を初めとする高山を眺める景勝の地であり、また豊かな田園が広がり、萩原守衛に代表される幾多の文化人の故郷でもあります。この安曇野に広域的なリクリエーション施設として建設省が設置することになった国営アルプスあづみの公園は、豊かな自然とのどかな田園風景の中で休養や余暇利用に役立つことが期待されております。広大な敷地の中には幾つもの景勝地や文化財があり、公園の価値を高めています。また埋蔵文化財も数多く存在し、公園の修景として活用される事が期待される一方、場所によっては記録保存を図らざるを得ない場合も生じて参りました。

穂高古墳群は古くから著名な有明古墳群を含み、大室古墳群などと並ぶ長野県を代表する古墳群として知られております。今回の発掘調査でも古墳の存在が期待されておりましたが、その結果は予想とは異なり、近世の開発に関する遺跡を調査することになりました。記録保存のうえ公園の一部として活用されることも期待しておりましたが、意外な結果に終わってしまいました。今後公園の建設が進むにつれ、さらに埋蔵文化財の保護措置が必要になるものと思われませんが、そのつど現状保存や記録保存のうえで活用できるよう、建設省と相談して参りたいと考えています。

当センターはこれまで高速道路や新幹線などの大型プロジェクトに関する埋蔵文化財の調査を主要な任務として参りましたが、それらの建設が一段落し、新たな展開を求められるようになって参りました。今回の調査を嚆矢として新たな事業に対応し、埋蔵文化財の活用に関しても適切な助言ができるよう、努力を重ねて参りたいと思います。

最後になりましたが、試掘調査から本報告書の刊行に至るまで、深いご理解とご協力をいただきました建設省関東地方建設局国営アルプスあづみの公園工事事務所、穂高町、堀金村、穂高町教育委員会、堀金村教育委員会、地元柏原地区、作業にご協力いただいた皆さん、またご指導いただいた長野県教育委員会に対し、心から感謝申し上げる次第であります。

平成9年2月20日

財団法人 長野県埋蔵文化財センター

理事長 戸田 正明

例 言

- ・本書は国営アルプスあづみの公園（堀金村・穂高町地区）建設に伴って実施された、穂高古墳群内の遺跡の発掘調査報告書である。
- ・遺跡記号は「EHT」とし、図面・写真などの記録類や遺物の注記に使用した。
- ・発掘作業は地元穂高町在住の11名の方々に協力していただいた。
- ・遺構測量に導入した写真測量・単点測量は、(株)共同測量社に委託した。
- ・穂高古墳群位置図は、国土地理院地形図（1：50,000）をもとに作成した。
- ・周辺遺跡分布図は、堀金村都市計画図・穂高町遺跡分布図（1：10,000）をもとに作成した。
- ・発掘範囲図は、建設省関東地方建設局国営アルプスあづみの公園工事事務所作成の地形図（1：1,000）に加筆して作成した。
- ・発掘調査から報告書作成まで、以下の方々・機関の援助を受けた。記して感謝したい。
長野県教育委員会、穂高町国営公園対策室、穂高町教育委員会、堀金村教育委員会、山下泰永、
- ・本書で報告した記録類や遺物は長野県立歴史館で保管している。

調査体制

- ・平成7年度（試掘調査）事務局長：峯村忠司、総務部長：西尾紀雄、調査部長兼長野調査事務所長：小林秀夫、長野調査事務所調査課長：百瀬長秀、担当調査研究員：田中正治郎、両角英敏
- ・平成8年度（記録保存及び整理作業）事務局長：青木久、総務部長：西尾紀雄、調査部長兼長野調査事務所長：小林秀夫、長野調査事務所調査課長：百瀬長秀、担当調査研究員：藤森俊彦、西嶋力（遺物写真撮影）、西嶋洋子（遺物復元）
- ・報告書の編集・執筆：百瀬長秀

目 次

序 i		
例言・調査体制 ii		
第1章 遺跡及び調査の概要 1	第3章 調査の結果12
1 遺跡の位置と概要 1	1 地形と層序12
2 調査の経緯 2	2 遺構と遺物13
3 整理の経過 4	第4章 成果と課題16
第2章 遺跡の環境 5	写真図版	
1 自然環境 5	抄 録	
2 歴史的環境 5		

図版目次

図1 穂高古墳群位置図	図2 発掘範囲図	図3 周辺遺跡分布図
図4 土層柱状図	図5 集石遺構平面図・断面図	図6 遺物実測図・拓影

表 目 次

表1 穂高町・堀金村遺跡一覧

写真図版目次

PL1 遺跡遠景	PL2 遺跡近景	PL3 集石遺構	PL4 集石遺構
PL5 「F12号墳」試掘調査		PL6 調査状況	PL7 出土遺物

第1章 遺跡及び調査の概要

1 遺跡の位置と概要

穂高古墳群は長野県南安曇郡穂高町にあり、飛騨山脈東麓の扇状地上に位置する(図1)。研究史上は穂高町有明地区の有明古墳群が早くから注目されてきたが、現在は穂高町に分布する後期に属する単独墳・群集墳からなる古墳群の総称して穂高古墳群の名称が用いられていると言ってよいだろう。

穂高町に隣接する堀金村や松川村にも若干古墳が存在している。その立地は穂高古墳群と共通で、そのうち堀金村の2基は烏川扇状地扇頂に位置して穂高古墳群F群に接近しており、関連について注意しなければならない存在であろう。

今回の発掘調査地点は穂高古墳群のうちF群の一角を占め、穂高町柏原3621-1～3621-2に所在する。標高は665mである。

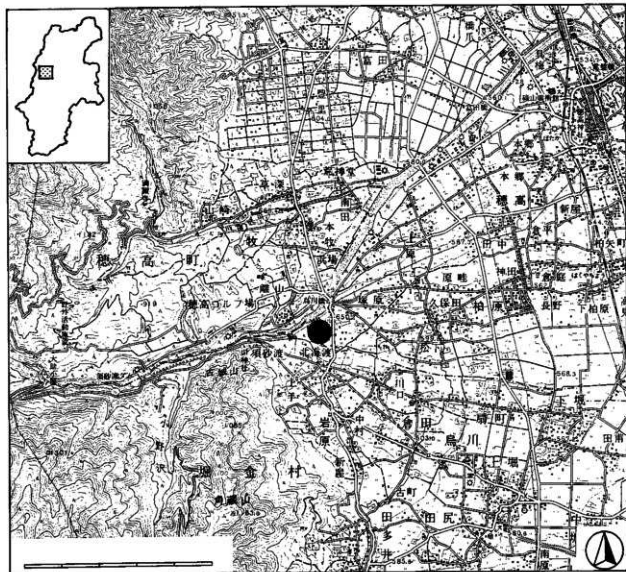


図1 穂高古墳群位置図(1:50,000)

2 調査の経緯

工事の概要

国営公園は広域的リクリエーションの需要に応じ、都市公園法に基づいて国が整備・管理する公園である。全国16カ所で計画・整備中で、そのうち10カ所は供用を開始している。アルプスあづみの公園は14番目の国営公園で、平成2年度から建設に着手した。建設担当は建設省関東地方建設局国営アルプスあづみの公園工事事務所である。用地面積は353haで、大町市・松川村地区と穂高町・堀金村地区に別れており、穂高町・堀金村地区は100haと広大である。北アルプスを背景とした自然環境と安曇野の田園風景を保全して、自然体験ゾーンや林間リクリエーションゾーンなど、アウトドア指向の需要に対応する計画のようである。まだ設計図が完成していないが、第1期工事範囲では現在の地形や植生の改変を極力押さえるよう設計されている。

調査受託の経緯

長野県では複数の市町村にまたがる広域的な開発事業に関して発生する埋蔵文化財の保護事業については、開発事業者と長野県教育委員会及び当該市町村教育委員会の間で保護措置を協議のうえ、記録保存が必要な場合は(財)長野県埋蔵文化財センターが対応する方針を取っている。国営アルプスあづみの公園は4市町村にまたがって建設されるので、この方針に従って平成2年度から関係機関の間で埋蔵文化財の保護協議がなされて来た。その結果、同公園内に存在する埋蔵文化財は、公園の修景の一部などとして現状保存を図るよう努力するものの、個別に協議したうえで記録保存が避けられない場合は、(財)長野県埋蔵文化財センターが建設省から直接受託して発掘調査することで、平成6年度に関係機関の合意が得られた。

大町市・松川村地域の公園用地内には9遺跡、穂高町・堀金村地域の公園用地内には9遺跡が周知されているが、それら周知の遺跡も範囲は不確定なので、遺跡の確認のための試掘調査も当センターが実施することとなった。また、現状保存が可能な場合、その保全方法や活用方法について当センターを含む学識経験者が助言することも了解された。

試掘調査の経緯と方法・結果

平成6年度の協議で、工事計画に従って平成7年度から試掘調査・記録保存のための発掘調査に着手するよう要請を受けた。平成7年度は大町市と穂高町で調査が必要となったが、大町市分については別途報告するとして、本書では穂高町分について述べる。

穂高町・堀金村地域の第1期工事は「小川広場」建設で、用地は穂高町柏原を中心にして堀金村の一部にかかる。その用地内には穂高古墳群F群の9号墳・10号墳が含まれている。両古墳は穂高町の上水道の水源地となっており、工事計画では水源地は移設するものの両古墳は現状保存とする設計であった。両古墳の活用方法については別途協議することにしてしばらく措き、群集墳の一角である以上9号墳・10号墳以外にも未知の古墳が存在する可能性が高いので、この一帯を仮称「小川広場遺跡」として、未知の古墳の存否を確認すべく、平成7年度に試掘調査を実施することとした。

試掘調査は平成7年10月3日～同18日にかけて実施された。F9号墳・F10号墳に隣接する公園用地約33,000㎡を対象とし、地形の傾斜に平行及び直交する方向にトレンチを設定し、0.4㎡級のバックホーを用いて掘削して遺構や遺物を探す方法を取った。トレンチの幅は約2.5m、総延長は1,328mで、実質調査面積は3,320㎡である(図2)。

その結果、古墳の石室の一部かと思われる石積1基を発見したほか、穂高町と堀金村の境界にあたる農道の下に古墳の墳丘の可能性のある地形の高まりが認められることが判明した。また、遺物包含層とは認

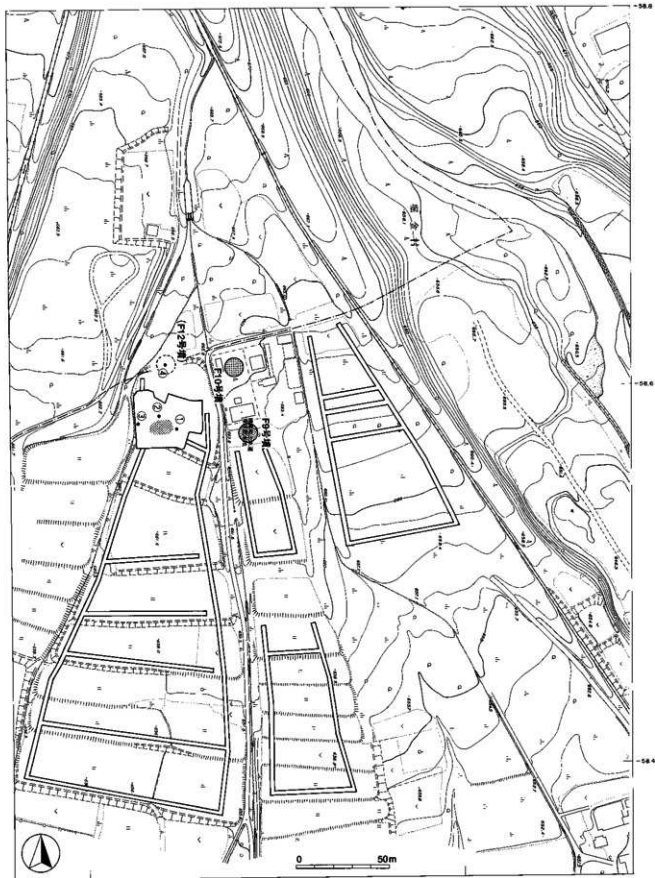


図2 発掘範囲図 (1 : 2,000)

定できなかったが微量の縄文土器を含む旧表土層の存在が認められた。穂高古墳群に属する新発見の古墳と考え、その保護措置について関係機関と改めて協議をもった。工事計画から見て根こそぎ破壊されるおそれはないので、古墳の墳丘や石室について記録保存とし、石室の状況を見たらうえて保存・活用できるよう再度協議することとした。記録保存のための発掘調査は、石室らしい構築物が発見された方の「古墳(F11号墳)」については平成8年度に、農道下に発見された「古墳(F12号墳)」については平成9年度に実施する事とし、用地買収が未了の堀金村分の用地内については、記録保存と同時に試掘調査を実施することとなった。

新発見の古墳2基は穂高町教育委員会によりF11号墳・F12号墳と命名され、発見届けが提出された。

記録保存の経緯と方法・結果

「F11号墳」を対象とした記録保存のための発掘調査は平成8年10月1日から開始された。平成7年度に発見した石室らしい石積みについて、その周囲を含めて全面的に調査した。調査範囲は約36m×28m、実質調査面積は約1,000㎡である。調査方法は、石積みを再検出するとともに、現水田耕作土の下にある旧地表層までバックホーで除去し、古墳の周溝を探して範囲を確定しようとした。また旧地表層中に含まれる縄文土器の採取にも努めた。

石積みは容易に再検出でき、その広がりも簡単につかめたが、石積みを構成する個々の礫はやや小さく、配列に規則性がなかった。古墳の上部が崩壊してしまっている可能性を考え、石積みの記録を作成したうえで上部を撤去し、下部に石室があるかどうか調査することとした。記録方法は全景の写真撮影のほか平面図はラジコンヘリを用いた航空写真測量とし、断面図は単点測量を応用して実施した。

記録終了後上部の石積みを撤去したが、下部の石積みにも規則性がなく、古墳らしい構造は全く確認できず、周溝も痕跡すら確認できなかった。この結果、「F11号墳」は古墳ではないと判断され、石積みの上部を撤去して下部まで調査してしまっただけで、調査後の保存・活用等についての再協議は不要となった。

「F11号墳」が古墳ではなくなったため、「F12号墳」についてもその評価に疑問が生じた。このため、急速、10月16日に試掘調査を実施して、存否の確認をすることとした。その結果、「F12号墳」は自然地形の高まりに過ぎず、埋蔵文化財としての保護措置は不要であることが判明した。

以上の結果から、当初試掘調査が必要だと考えていた堀金村分の用地内については、古墳が存在する可能性はほとんど無いと判断されるに至った。そこでその保護措置は工事立会いとし、新発見の古墳や遺跡があれば再協議することにした。平成8年度の穂高町・堀金村地域分の発掘調査は埋め戻しまで含めて10月24日で終了した。

調査結果を要約すると、「F11号墳」は古墳ではなかったが集石遺構としての記録保存を完了し、「F12号墳」は埋蔵文化財ではなかったため保護措置不要、堀金村分の試掘調査については工事立会いに変更することになった。

3 整理の経過

記録保存の発掘調査報告書は発掘調査の結果を見て刊行計画を立てるのが一般的だが、埋蔵文化財関係の委託事業を今年度で完了したいという建設省側の事情と、調査結果から見て報告書の刊行は容易であることから、平成8年度で穂高町関係の報告書を刊行することに変更した。

整理作業は大町市分の試掘調査の終了後、12月～1月に実施した。遺構図面や写真を整理し、少量ながら出土した遺物の実測・撮影などの記録を作成し、報告書にまとめて平成9年2月に刊行した。

第2章 遺跡の環境

1 自然環境

地 形

日本列島を東西に分断する糸魚川-静岡構造線は、その西側が隆起して飛騨山脈を始めとする高山帯を形成し、東側は陥没して松本盆地・諏訪盆地・甲府盆地などの低地を形成する。飛騨山脈を侵食して東に流下する幾つかの河川により、飛騨山脈の東麓、すなわち松本盆地西縁には、地理の教科書に載るような典型的な扇状地が南北に並んで発達する。それらの河川の一つ、烏川は須砂渡より上流の溪谷では河岸段丘が発達し、現河床を含め5段の段丘面を形成する。その第4段丘面の下流部は烏川扇状地と呼ばれる典型的な扇状地のひとつを形成する。烏川扇状地の扇端はやや不明瞭だが、広く考えれば面積約30km²を測り、その形成年代は更新世末から完新世にかけてとされる。扇状地の地表は西から東に向けて一定の傾斜をもって一方的に下がるが、所々小さな沢が侵食するため、扇頂を離れるほど南北方向にある程度の起伏が生じる。今回調査した穂高古墳群F支群は烏川扇状地の右岸側の扇頂部付近に立地する。

地 質

飛騨山脈の南部、烏川流域以南は、梓川層群と命名された古生代~中生代の地層から成り立っている。梓川層群は砂岩・粘板岩などからなり、所々花崗岩が貫入し、変成作用も受けている。穂高古墳群の横穴式石室に使用される岩石や、今回の発掘調査で検出された集石遺構を構成する岩石は、梓川層群の岩相をよく反映しているといえる。穂高古墳群の立地する烏川扇状地を構成するのは、梓川層群に起源する砂礫層で、その表面近くにはローム層が乗る。烏川左岸、穂高町牧地区の集落付近では厚いローム層が発達するが、右岸の今回の発掘地点ではかすかにそれらしい層が認められるに過ぎない。今回の発掘地点周辺の扇状地堆積物の成立が、洪積世でもあまり遡らない時期である事を示すのかもしれない。

2 歴史的環境

穂高古墳群周辺の遺跡分布

埋蔵文化財包蔵地として周知されているのは、穂高町で65遺跡(城跡を含む)・古墳83基、堀金村で23遺跡(城跡を含む)・古墳4基である。これらのうち烏川扇状地周辺の遺跡を図3・表1に掲載した。今回の調査に関連する縄文時代中期と古墳時代前後の遺跡について、『穂高町誌』・『穂高町遺跡分布図』・『堀金村遺跡分布図』などをもとにし、穂高町教育委員会の最新の見解を踏まえて、分布状況を簡単に紹介する。分布図からは堀金村には遺跡が少なく規模も小さいように見受けられるが、穂高町に比べ遺跡の分布調査が立ち遅れていることが反映された結果である。

縄文時代中期には、扇状地の扇頂から山麓にかけて立地する遺跡と、烏川扇状地の扇端から万水川左岸の自然堤防上にかけて立地する遺跡がある。前者には山崎[3]、離山[6]、新林[12]、岩原[37]、安楽寺址下[38]などがあり、古くからその存在が知られている。恐らく、かなりの規模の集落が含まれるだろう。後者には矢原宮地[27]、馬場街道[29]、大つま[42]などがあるが、現在の地表下深く埋もれていて実態が不明である。馬場街道遺跡からは土坑が検出されており、最近の長野盆地の調査例などから見て、本格的な集落が存在する可能性が十分ある。山麓と自然堤防の間は、厚い扇状地堆積物に妨げられて、遺跡の存在は不明である。

穂高古墳群のうち現在の烏川流路の右岸側に立地するのはF群[F1~F12]とG群[G1]である。



図3 周辺遺跡分布図(1:20,000)



表1 穂高町・堀金村遺跡一覧

NO	遺跡名	所在地	内 容
1	穂高古墳群F11号墳	穂高町柏原	今回の調査地点
2	寺島畑	穂高町有明	縄文時代中期後半～後期の集落
3	山崎	穂高町牧	縄文時代中期～後期の集落、古墳時代前期勾玉
4	草深	穂高町牧	縄文時代中期～後期の集落
5	十三屋敷	穂高町牧	縄文時代集落
6	麓山	穂高町牧	縄文時代早期・中期～晩期の集落・祭祀遺構（後期の住居4軒・配石遺構17他）、弥生時代土器、平安時代土器
7	大坂	穂高町牧	縄文時代中期集落
8	堰下	穂高町牧	縄文時代集落、古墳時代土器
9	ショウノヒナタ	穂高町牧	縄文時代中期後半～後期集落、弥生時代後期土器
10	南原	穂高町牧	縄文時代前期後半集落
11	神谷	穂高町牧	縄文時代中期後半～後期の集落
12	新林	穂高町牧	縄文時代早期～後期の集落（中期の住居21軒他）
13	荒神堂	穂高町牧	縄文時代集落
14	他谷	穂高町牧	縄文時代中期集落
15	塚原	穂高町柏原	弥生時代後期土器・石器
16	藤塚	穂高町穂高	古墳時代後期集落（住居30軒他）、平安時代集落
17	宗徳寺	穂高町穂高	平安時代集落
18	芝宮南	穂高町穂高	平安時代集落
19	穂高高校北	穂高町穂高	平安時代集落
20	大坪沢	穂高町穂高	平安時代集落
21	南原	穂高町穂高	縄文時代後期土器、古墳時代集落
22	長者池	穂高町穂高	古墳時代集落、平安時代集落
23	追掘	穂高町穂高	平安時代集落
24	欠原池現池	穂高町穂高	平安時代集落
25	三枚藪	穂高町穂高	弥生時代後期集落（住居6軒）、古墳時代後期集落（住居1軒）、奈良～平安時代初期集落（住居21軒他）、平安時代末～中世（用水・建物他）
26	矢原五輪畑	穂高町穂高	古墳時代前期集落（住居4軒）、奈良～平安時代初期集落（住居2軒）、平安時代後期集落（住居9軒）
27	矢原宮地	穂高町穂高	縄文時代中期土器、奈良～平安時代集落
28	西反田	穂高町穂高	古墳時代後期～平安時代集落
29	馬場街道	穂高町穂高	縄文時代中期後半土坑・土器、弥生時代土坑・土器、古墳時代中期～後期集落（住居6軒）、奈良時代集落（住居2軒）、奈良～平安時代集落（建物1棟）、平安時代集落（住居5軒）、中世製鉄遺構
30	下原	穂高町穂高	縄文時代中期後半土器
31	ハッロ	穂高町穂高	奈良～平安時代初期集落（住居8軒・建物2棟）、平安時代後期集落（住居10軒・建物2棟）
32	柏原	穂高町穂高	古墳時代後期～平安時代集落
33	中在地	穂高町穂高	縄文時代中期後半土器、古墳～平安時代集落（住居27軒）
34	堀之内	穂高町穂高	古墳時代中期～後期集落、中世集落
35	弥之助畑	穂高町穂高	平安時代集落
36	空保木城跡	穂高町牧	中世館跡

37	岩原	堀金村島川	縄文時代集落
38	安楽寺址下	堀金村島川	縄文時代集落
39	山の神下	堀金村島川	縄文時代集落
40	十兵衛屋敷	堀金村島川	古墳時代集落
41	中村	堀金村島川	古墳時代集落
42	大つま	堀金村島川	古墳時代集落
43	岩田天神	堀金村島川	奈良～平安時代集落
44	田多井北村	堀金村三田	縄文時代集落
45	須砂渡口南古墳	堀金村島川	古墳1基
46	岩原古墳	堀金村島川	古墳1基
47	前の髪古墳	堀金村島川	古墳1基
E1	穂高古墳群E1号墳	穂高町牧	古墳1基(径11.0m・高さ1.0m)
E2	穂高古墳群E2号墳	穂高町牧	古墳1基(径14.0m・高さ1.0m)、横穴式石室、土器
E3	穂高古墳群E3号墳	穂高町牧	古墳1基
E4	穂高古墳群E4号墳	穂高町牧	古墳1基(径10.0m・高さ1.3m)
E5	穂高古墳群E5号墳	穂高町牧	古墳1基(径15.0m・高さ3.0m)
E6	穂高古墳群E6号墳	穂高町牧	古墳1基(径20.0m・高さ3.5m)、直刀、馬具、鉄鏃、金環、玉類
E7	穂高古墳群E7号墳	穂高町牧	古墳1基(径15.0m・高さ3.0m)、横穴式石室、鉄鏃、直刀
E8	穂高古墳群E8号墳	穂高町牧	古墳1基(径15.0m・高さ3.0m)
E9	穂高古墳群E9号墳	穂高町牧	古墳1基(径5.0m・高さ1.0m)
E10	穂高古墳群E10号墳	穂高町牧	古墳1基(径8.5m・高さ1.5m)、勾玉、直刀
E11	穂高古墳群E11号墳	穂高町牧	古墳1基
E12	穂高古墳群E12号墳	穂高町牧	古墳1基、玉類
E13	穂高古墳群E13号墳	穂高町牧	古墳1基、直刀、須恵器
E14	穂高古墳群E14号墳	穂高町牧	古墳1基
E15	穂高古墳群E15号墳	穂高町牧	古墳1基
E16	穂高古墳群E16号墳	穂高町牧	古墳1基
E17	穂高古墳群E17号墳	穂高町牧	古墳1基、直刀
E19	穂高古墳群E19号墳	穂高町牧	古墳1基
F1	穂高古墳群F1号墳	穂高町柏原	古墳1基(径4.0m・高さ0.5m)、横穴式石室、須恵器
F2	穂高古墳群F2号墳	穂高町柏原	古墳1基(径3.0m・高さ1.0m)
F3	穂高古墳群F3号墳	穂高町柏原	古墳1基(径9.8m・高さ1.5m)
F4	穂高古墳群F4号墳	穂高町柏原	古墳1基(径6.0m・高さ2.0m)
F5	穂高古墳群F5号墳	穂高町柏原	古墳1基(径10.0m・高さ1.6m)、横穴式石室
F6	穂高古墳群F6号墳	穂高町柏原	古墳1基(径10.0m・高さ1.0m)、横穴式石室
F7	穂高古墳群F7号墳	穂高町柏原	古墳1基
F8	穂高古墳群F8号墳	穂高町柏原	古墳1基
F9	穂高古墳群F9号墳	穂高町柏原	古墳1基(径9.0m・高さ1.5m)
F10	穂高古墳群F10号墳	穂高町柏原	古墳1基(径10.0m・高さ1.3m)、横穴式石室
F12	穂高古墳群F12号墳	穂高町柏原	古墳1基
G1	穂高古墳群G1号墳	穂高町柏原	古墳1基、横穴式石室、直刀、馬具、玉類、金環、土師器、須恵器

今回調査した2基を含む12基から構成されるF群は、扇状地の傾斜に沿うようにほぼ1列に東西に並ぶ。今回の調査地点はF群中最も扇頂部に近い。扇状地の扇尖に立地するG群は今のところ1基だけで構成されるが、その1基・G1号墳(上原古墳)は単独墳ではなさそうで、周辺には未発見の古墳が存在する可能性が高い。左岸側には19基から構成されるE群[E1~E19]がある。E群は幾つかのまとまりを含んで比較的広範囲に分布する。このうちE6号~E8号・E14号の4基からなるまとまりは烏川を挟んでF群と対峙するかのように構築される。掘金村にも古墳が5基知られており、烏川扇状地には須砂渡口南古墳[45]と岩原古墳[46]が存在する。両者は扇状地扇頂近くの山麓に立地する単独墳で、穂高古墳群E群とは別群と考えたほうがよさそうだが、注意しておかねばならない。

古墳時代の集落遺跡は、烏川扇状地の扇端から万水川左岸の自然堤防上にかけて立地する。弥生時代後期から奈良時代までを含めれば、十数遺跡が東西1.5km×南北3km程度の範囲に密集する。塚塚[16]、三枚橋[25]、矢原五輪畑[26]、矢原宮地[27]、馬場街道[29]、八ッロ[31]、中在地[33]、十兵衛屋敷[40]、中村[41]、大つま[42]などの遺跡がそれで、穂高町内では発掘調査例がかなりあり、引き続き古代まで継続するまとまった集落が多いことが確認されている。穂高町教育委員会ではそうした遺跡が存在する敷地全体を遺跡の範囲と考えており、「遺跡群」として理解されていると言ってよい。掘金村内の遺跡もいずれは同様に理解できるようになるだろう。今回の調査地点からそうした集落域までは約4kmの距離があり、中間の扇状地扇尖には弥生時代後期の遺物が発見された塚原[15]以外には遺跡はない。塚原遺跡が扇状地の現地表近くに立地するとするならば、扇状地堆積物の下に弥生時代~古代の遺跡が埋もれていることは考えにくくなる。扇状地は集落の空白域と考えてよいかもしれない。それとは別に、山麓に立地する遺跡から、少量の弥生時代~古墳時代の遺物が採取されている。山崎[3]、難山[6]、堰下[8]、ショウノヒナタ[9]などの遺跡がそれであるが、断片的な資料に過ぎず、地形上からも集落はなさそうである。

穂高町を始めとする南安曇地域では、用水路の調査をもとにして古代以来の水田開発史の研究が盛んである。用水自体が埋蔵文化財として扱われることはまれなので、遺跡分布図からは漏れているが、穂高古墳群F群周辺には柏原沢水系に属する用水群が幾つにも枝分かれて水田を潤しており、その起源を古墳時代に求める見解もある。

穂高古墳群F群の概要

穂高町内の古墳群の研究史は古い。とりわけ有明地区の有明古墳群については明治時代中頃から学術誌などに紹介され始めているが、詳細は『穂高町誌』に詳しいのでそれに譲る。穂高町内には有明地区以外にも牧地区や柏原地区内の塚原地区に群集墳・単独墳が存在しており、昭和39年から穂高町教育委員会が実施した町内の古墳の現状に関する悉皆調査では、穂高町全体を通しての古墳群の命名法が採用され、有明古墳群は穂高古墳群A群~D群・H群の5群に、牧地区の古墳群は同E群に、柏原・塚原地区の古墳群は同F群・G群の2群に整理された[穂高町教育委員会1970]。

穂高古墳群の研究の中で最も注目すべきなのは岩崎卓也らのそれであろう[岩崎他1983]。岩崎らは穂高古墳群A群~C群等を分析し、石室をa~cの3類型に区分した。簡単に紹介すれば、a類の石室は長さ9m前後、幅2m近くと大形で、南に開口する傾向があり、7世紀前半の年代観の副葬品をもつ例を含む。b類の石室は長さは9m前後だが、幅は1~2mと狭長で、南西~南東方向に開口する。副葬品から6世紀後半の年代観が与えられ、穂高古墳群の中では最古と目されるのは、すべて南西に開口するb類の石室をもつ古墳である。またb類の中には南東に開口する石室で、7世紀前半の年代観の副葬品をもつグループもある。c類の石室は長さ5m前後、幅1~2mと小形である。同類形の石室をもつ古墳は近接して存在する傾向が強く、一定の狭いエリアに連続して構築されたと推測している。また岩崎らの調査によれば、B1号墳の石室構築にあたって地面をかなり掘りくぼめており、その床面は現地表より1.5mも

低くなっているという。恐らく2m近い掘り形をもち、それこそ半地下式の石室だったのではないか。石室の高さや床面の状況から見て、穂高古墳群の多くがある程度の掘り方を用意した上で石室を構築していることが推測される。

穂高古墳群F群は今回調査した2基を含めて12基からなる。遺存状況は必ずしも良好ではなく、墳丘がある程度推定できるのはF4号・F5号・F7号・F9号・F10号の5基だけである。『穂高町の古墳』[穂高町教育委員会1970]によれば、いずれも直径10m程度の円墳で、高さは1.5m程とされる。石室はF5号・F6号・F7号・F10号で確認されており、いずれも内法で幅1.0m~1.5m、長さ3.2m~6.0m、高さ1.2m程度と見られている。また石室は2号墳を除けば南東方向に開口する。発掘例は1基だけで、F1号墳(一本杉古墳)が昭和50年に発掘調査された。墳形などは不明だが無袖・やや胴狭りの横穴式石室をもち、玄室の入口に閉塞石を配する。副葬品は須恵器高杯破片1点のみが残されているという。これらの石室の規模や開口方向は岩崎らの分析に従えばC類に該当する。同類型で同方向に開口する石室をもつ古墳が集中して存在するF群は、一連の構築物である可能性が強いことになろう。岩崎らはC類の石室をもつ古墳の年代観について明記していないが、b類の石室の開口方向が南西(6世紀後半)から南東(7世紀前半)へと変化している事から見れば、C類も7世紀前半以降の産物である可能性を考えてもよいかもしれない。なお、隣接するE群、G群にも発掘例がある。E6号墳(狐塚三号古墳)は明治44年に発掘されたようで、径20m程度、高さ3.6mと大形の墳丘をもつ。石室については文献により記載が異なっているが、規模は長さ5.0m、幅1.5mで、南東に開口するとの記録もある。副葬品は直刀8口以上、鉄鏃、轡、金環、玉類、青銅銅、須恵器などで、7世紀前半の年代観が与えられている。E7号墳(狐塚二号古墳)は昭和26年に発掘調査された。墳丘は径15m、高さ2mで、長さ5m程度・幅2m程度で南東に開口する横穴式石室をもつという。玄室と羨道の区分が不明だが、玄室を前後に区分する石列がある。直刀、鐔、鉄鏃、金環などが副葬されている。G1号墳(上原古墳)は昭和5年に発掘調査された。水田開発で墳丘が削平されているが、地表下0.6mに天井石を含む横穴式の石室が完全に残されていた。石室の規模は文献によってまちまちだが、報告された見取り図から判断するとb類に含めてよく、開口方向はほぼ南らしい。玉類、金環、轡、杏葉、直刀、須恵器などの副葬品があり、6世紀後半の年代が与えられている。

水利関係・水田開発の経過

主として用水路の分岐形態の違いに着目し、用水路の命名方法や遺跡(古墳・集落)の分布、水田耕土の深さ等から、水田開発の経過や時期を推定する研究が進められている。それによれば幹線用水路から枝堰が樹枝状に分岐し、用水路が「〇沢」と称されるのが最も原始的で、耕作土が30cm以上の深さをもつ水田適地に灌漑する開発は、古墳時代にまで遡る可能性があるという。

今回の調査地点付近はそれらの中でも古墳時代に起源するとされる用水路のひとつである柏原沢の灌漑する範囲に属している。柏原沢の流域にはG群とF群の2群の古墳群が知られている。そのうちG群は上原古墳のみから構成され、先に記したように6世紀後半の年代が与えられているが、これを柏原沢を支配した首長の古墳と見、それより下流で古墳時代の水田開発が行われたとする見解が示されている。上原古墳より上流は耕作土が浅く水田適地ではないため、墳墓を構築するエリアとされF群が分布することになった、ということにならうか。用水路の形態や分布からその開削過程を復元する研究は方法論的にも魅力があり、開発の段階設定については有力な仮説だと言えよう。しかし、水路開削の実年代については推測の域を出ず、それぞれの段階がどの年代に属するのかについての見解の当否はなかなか証明できるものではなさそうだ。

今回の調査地点付近は、柏原沢に隣接しているとはいえ表土が浅く、これまでの水田開発史の研究でもさして古い開発地ではないと考えられて来た。第2次世界大戦直後の土地利用図によれば桑畑になっており、発掘調査でも現水田畦畔には桑の根がかなり残っていて、このことを裏書きしていた。

第3章 調査の結果

1 地形と層序

微地形

今回の調査地点は烏川扇状地の中央に位置し、烏川溪谷の出口から700mほど下がったあたりである。大規模な烏川扇状地としては、ほぼ扇頂と言ってよい場所だろう。扇状地の中央はほぼ西から東に傾斜しており、調査地点も同様である。調査地点は烏川の右岸になり、現在の流路は調査地から100mほど北に寄って10m程の比高差をもつ。調査地点の南側100m程の位置に沢筋が認められ、採石事業でかなり掘り取られている。この沢に向かって地形は緩く傾斜している。全体として西から東へと明瞭に傾斜し、南に向かってもゆるやかな傾斜をもつが、起伏は少ないので、樹林が伐開され水田と化した現在は大変に見通しがよく、万水川の自然堤防や後背湿地も一望できる。

層序と土質

土壌図に従えば、烏川扇状地右岸側の扇頂には「表層腐植質黒ボク土」と「中粗粒灰色低地土灰色系」が分布するが、今回の調査地点は前者の分布域に当たるようだ。調査地点周辺の層序はほぼ一定していることが試掘調査の結果でも判明しており、今回の調査結果もこれまでの見解に総合的であった。調査範囲内の4地点の土層柱状図を図4に示した。基本的な層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層：水田耕作土。礫の混入量が多い。「表層腐植質黒ボク土」に該当しよう。

第Ⅱ層：砂礫層。上面に酸化鉄が集積しており水田の床土となっている。現在の田面の東半分に分布しており、水田造成時に西半分では切り取られてしまったものと推測される。

第Ⅲa層：旧表土。腐植質で漆黒、礫はやや少ない。土壌学でいうA層（土壌化が進んだ層）に相当し、「表層腐植質黒ボク土」に該当しよう。火山灰起源だが、2次堆積かも知れない。この層の上面に集石遺構が構築される。また縄文時代～近世の遺物が微量出土する。

第Ⅲb層：旧表土の土壌B層で、腐植と砂礫を含み、褐色を呈する。縄文土器（図6-1・写真PL6-1）や古墳時代の土器が微量含まれる。

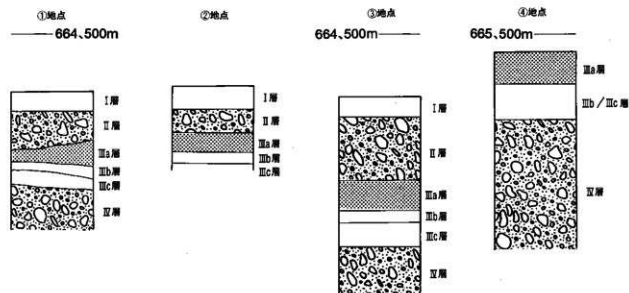


図4 土層柱状図 (1:30)

第Ⅲc層：旧表土の土壌C層で、黄褐色の火山灰土と砂礫が混じっている。ほとんど土壌化していない。

遺物は皆無である。

第Ⅳ層：砂礫層。上部にはごく少量火山灰土が混じるようだ。やはり遺物は皆無である。

2 遺構と遺物

縄文時代～古代の遺物

第Ⅰ層から第Ⅲb層にかけて縄文土器・土師器が微量、散漫に出土した。

縄文土器は1点を除きいずれも小破片だが、それらは必ずしも磨滅している訳ではなかった。土層柱状図(図4)③地点の第Ⅲb層からは完形に近い縄文土器が1点出土しており(図6-1・写真PL6-1)、調査地点周辺にも縄文人の足跡が残されていると考えてよいだろう。日常の居住の場ではないものの、例えば生業にかかわるなんらかの活動の場となっていたことも推測できる。さてその縄文土器であるが、小児頭大程度の礫の間から横倒しの状態で出土した。掘り方は認められなかったが、据え置かれた可能性もなくはない。口径19.0cm、高さ27.2cm、器厚9mmの深鉢形土器で、胎土は橙褐色で長石砕片など火山灰起源の鉱物が混入される。成形は粘土紐積み上げで、外面・内面とも簡略なナデで整形される。器形は底部からはほぼ直線的に立ち上がり、体部で緩く外反し、口縁部は直立する。文様帯構成は、口縁部と胴部に分かれる。口縁部文様帯は口縁直下に太い横位沈線を1条配するだけだが、この沈線は指で施文したか施文後指でなぞっていると思われる。体部文様帯は口縁部文様帯の直下から底部まで及ぶ。口縁部文様帯の直下に、鍵状のモチーフで始まる縦位沈線を途切れがちながら底部まで垂下させ、体部文様帯を縦位に分割する。その単位数は不明だが、間隔から見て6単位以上にはなりそうだが。この分割線の間は縦位かわずかに斜位となる沈線を不規則に配置して埋めつくす。分割線と同様にヘラ状工具で浅く施文しているが、工具の当たりがさらに浅いので途切れがちとなり、むしろヘラによるナデに近いと言った方がよいくらいだ。縄文は一切使われない。中期末の曾利5式と見られるが、文様モチーフはかなり崩れている。

それ以外の縄文土器は特記できる出土状況を示さない。図6・写真PL6-2～7は早期前半の押型文土器で、小破片ばかりのうえ、器面が風化して整形痕がほとんど観察できないが、細久保式の範疇に入るだろう。胎土の色調は茶褐色、火山灰起源の長石らしい破片や石英の破片を含む。2は唯一の口縁部で、外傾し、口唇部はていねいにナデられる。2・3は楕円押型文で、横位施文と縦位施文が交錯するが、2点とも横位施文が先行する。4とともに楕円文の粒はくっきりしており、深く刻まれた工具が使用されたことを示している。4～8は傾きが不明で、断面図には厚さだけを示した。5・7は楕円文、6は格子目文で、いずれも刻み方が浅く不明瞭である。図6・写真PL6-8は無文だが縄文土器であろう。図6・写真PL6-9は黄褐色で石英・長石の破片を多量に含む。2～3条の沈線で曲線を描き、LRの縄文を併用する。後期前半の堀ノ内式土器であろう。

古墳時代以降の土器も特記できる出土状況を示さない。写真PL6-10～13は古墳時代の煮沸形態の土器で同一個体の可能性もある。10は口縁部で、口唇部を強くヨコナデし、外面は軽くミガキ、内面はナデで仕上げる。写真PL6-14・15は時期を特定できないが、古墳時代～中世の煮沸形態の土器であろう。

近世の遺構と遺物

集石遺構は今回の調査地点のほぼ中央、国土座標ではX=34840.0000、Y=-58580.0000(那珂産標系)付近にあたる。西側半分は第Ⅰ層直下で、東側半分は第Ⅱ層直下で検出され、第Ⅲa層直上に構築されている。掘り方をもたないことは断言できる。周辺では全般的に大形の礫が少なからず点在し、集石の境界を限定しにくくしているが、小児頭大の石が重なって検出される範囲を集石の範囲とした。南北約8m×東西約6m、厚みは中心部で0.5m程度である。この集石を覆うのは第2層の砂礫層であるが、集石を構

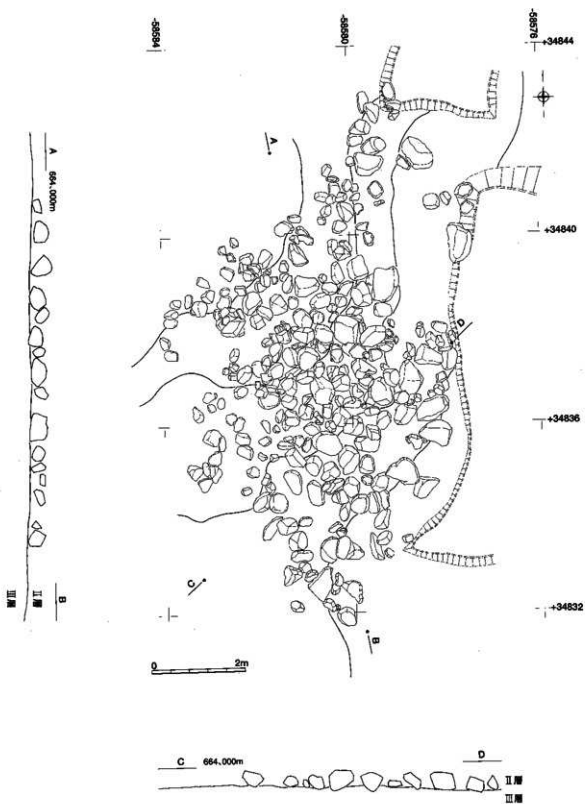


図5 集石遺構平面図・断面図 (1:80)

成する大形の礫の間には砂礫層はほとんど入り込んでおらず、かなりの隙間が残っている。自然現象で礫が集中したのなら礫間には砂礫が詰まるはずで、このような検出状況はこれらの礫が人為的に集められたものであることを示している。また試掘調査の結果ではこのような礫の集中箇所はここ以外にないので、ここが唯一礫を集める必然性があった場所だったと考えざるを得ない。集石を構成する礫には大小がある。小さい礫は径20cm程度、大きい礫は径40cm～50cm程度で、小児頭大から一人では持ち上げられないくらいの大きさである。大形の礫には花崗岩が多く、小形の礫には砂岩質の岩石が多いようだ。花崗岩の礫は角が丸くなった円礫ばかりで、砂岩は円礫のほか亜角礫もある。砂岩の方が割れ易いのであろう。周辺に存在した転石も形状や岩質には違いがないので、扇状地堆積物の中に含まれている礫がそのまま集石に転化されたのだと思われる。

集石を構成する石は特に配列された様子はない。特定の平面形を意識せず、また大小の礫を組み合わせることもなく、一部分2段程度に乱雑に積み上げられているだけである。礫間からの出土遺物は写真PL 6-16に示した染め付けが唯一である。瀬戸又は美濃の産の湯呑み茶碗と見られ、19世紀後半頃製作された遺物である。使用され廃棄されたのはさらに新しい時期だと思われる。縄文時代～古墳時代の遺物を含む第Ⅲa層の直上に構築されること、近世の染め付けが礫間から出土していることからして、近世に属する遺構であると考えられる。

ところで、第Ⅲa層は旧地表と考えられ、西から東へほぼ現在の地形に沿って傾斜しており、当地域の本来の微地形を示しているのだろう。一定の傾斜をもつことと溶脱・集積といった化学変化が認められない土質からして、第Ⅲa層は水田化されたことがない層であるのは間違いない。この集石遺構は当地が水田化される以前の構築物であることは確実だろう。水田化に伴った整地作業で出て来た礫を処理したことも考えられなくはないが、構築された位置からみればその解釈には少々無理がある。傾斜地で水田区画を水平に保つためには、処理に困るような大形礫は水田区画のなかで一番傾斜の低い側、畦畔にかかるあたりに集めればよいはずであろう。しかしこの集石は現在の水田区画の中では真ん中よりも原地形の低い側にあるものの、畦畔からはある程度離れていて、現田面を水平に保つもあまり役に立ってはおらず、礫の一部は水田耕作土中に頭を出して耕作の支障にすらなっている。こうした点を考慮すれば、水田化に先行する何らかの開発に伴って構築されたか、発生した礫の処理を行った結果できあがった遺構ではないかと思われるのである。

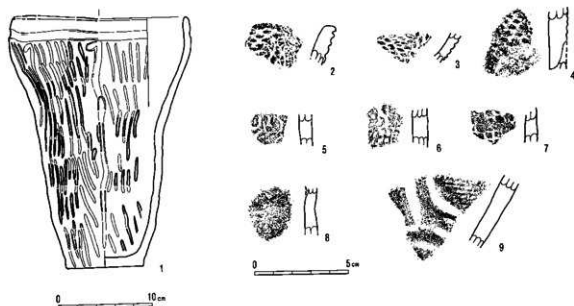


図6 遺物実測図(1:4)・拓影(1:2)

第4章 成果と課題

本遺跡の評価と課題

試掘調査を実施してもいざ発掘してみると見込みとは全く異なる内容になってしまふことはままする。今回の発掘調査はその典型例となってしまった。広域にわたる試掘調査の結果、穂高古墳群F9号墳・F10号墳から50m程度しか離れていない場所に発見された石積みということで、やや早まって古墳と判断してしまつたのが誤りであつたわけで、まずそのことを反省せねばならない。

予想とは異なつたが、発見された集石遺構は当地の開拓に関する何らかの構築物であつたことが推測された。当地は柏原沢の流域で沢に接近しており、古代以来の開発史研究が盛んな当地にしてみれば、興味深い遺構であると言えるように思う。これまでの用水路に視点をあてた研究の中で、扇状地扇頂から扇央にかけての開拓時期については、資料がほとんど無いこともあつてあまり問題にされて来なかつたようだが、今回の調査によって扇状地扇頂の開拓がかなり遅い時期になることが推測できたように思う。用水路の開削が即周辺の開拓につながるのではないのだから。また、今回の調査によって、扇状地扇頂～扇央にかけての土質は、薄い表土層の下はほとんど砂礫層ばかりであることが判明した。その砂礫層は大変厚く、保水力は全くない。これまでの開発史研究では用水路の位置についての検討は進んでいるが、どのような構造の用水路を想定するのかについてはあまり深められていないようだ。砂礫層の中に構築する用水路はどのような構造でなければならなかつたのか、またその構築に必要な技術はどのようなもので、技術史上どんな段階で可能であつたのか、等、これまで余り注意されて来なかつた新たな課題に気づかされた調査であつた。

穂高古墳群の現状と問題点

今回の発掘調査の結果から見て、穂高町・堀金村地区のアルプスあづみの公園内のような、扇状地扇頂～扇央にかけての表土が薄い場所では、煙滅古墳が存在する可能性が低いことが推測されるに至つた。もっとも扇状地扇側はこの限りではあるまい。

穂高古墳群は古くから著名で初期から発掘調査もなされて来たが、岩崎卓也らの研究を除けば最近の調査・研究はやや停滞気味のように思う。一方、古墳時代の集落は穂高町教育委員会の努力で様相が解り始めて来た。集落と古墳群の双方を把握できる条件は整いつつあると言えよう。長野県内では屈指の古墳群だけに、地域研究者の積極的な取り組みを望みたい。また古墳群の保存についてはあまり良好とはいえない。やはり穂高町教育委員会の努力で1964年に標柱が立てられたのだが、それ以後の保護の手立が難しいようだ。アルプスあづみの公園内のF9号墳・F10号墳などは、公園の修景として活用することが十分可能なので、単に現状のまま残すだけでなく積極的な修復と利用が望まれる。また、そうした契機を捉らえて、他の古墳についても保全と活用が図られることを期待したい。

【引用・参考文献】

- | | |
|----------------|-----------------------------------------------------|
| 岩崎卓也・松尾昌彦・松村公仁 | 1983「有明古墳群の再調査」『信濃』35-11 信濃史学会 |
| 猿田文紀 | 1931「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」『信濃考古学会誌』
第2年第5・6輯 信濃考古学会 |
| 穂高町誌編纂委員会 | 1991『穂高町誌』穂高町誌刊行会 |
| 穂高町教育委員会 | 1970『穂高町の古墳』柳沢書苑 |
| 堀金村誌編纂委員会 | 1991『堀金村誌』堀金村誌刊行会 |

南上空より



東側より





南東側より



北側より



西側より

西北上空より



西北側より





真上より



南側より

調査前の近景、
東側より



東側より



南東側より

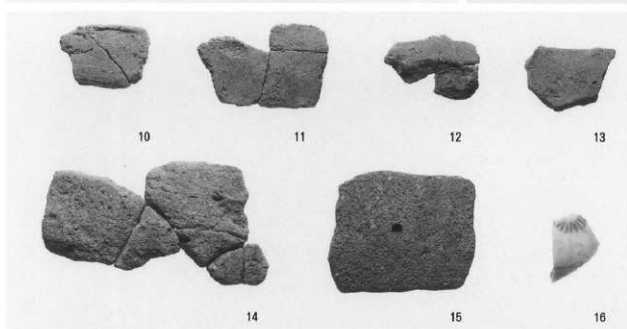




土器（図6-1）
出土状況



平成7年度試掘調査



調査報告書抄録

書名	国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書	
副書名	穂高古墳群—近世集石遺構の調査	
巻次	1	
シリーズ名	(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	
シリーズ番号	23	
編著者	百瀬長秀	
編集・発行機関	財団法人長野県埋蔵文化財センター	
所在地	〒387 長野県更埴市屋代260-6	TEL 026-274-3891
発行年月日	平成9年2月20日	
所収遺跡名	穂高古墳群	
遺跡所在地	長野県南安曇郡穂高町柏原	
長野県埋蔵文化財センター遺跡記号	EHT	
地図(1/25,000)	『信濃小倉』	
位置、標高	北緯36° 19'、東経137° 51'、標高665m	
発掘調査期間	平成8年10月1日～10月24日	
発掘調査面積	1,000㎡	
発掘調査原因	国営アルプスあづみの公園建設に伴う事前調査	
主な遺構・時代	集石遺構1基(近世)	
主な遺物・時代	土器、陶器(縄文時代、古墳時代～古代、近世)	

(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書23

国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書1

穂高古墳群—近世集石遺構の調査

発行 平成9年(1997)2月20日発行

発行者 建設省関東地方建設局

(財)長野県埋蔵文化財センター

〒387 長野県更埴市屋代清水260-6 ☎ 026-274-3891

印刷 第一印刷株式会社

